

## 農業とともに 「矯正の場」から 「終の棲家」へ

不良少年の「矯正」の場から  
はじめた喝破道場。  
今は、生きづらさを抱えた人が、  
もう一度、社会に復帰するための  
リハビリの場になっている。  
しかしこれからは、  
「終の棲家」にする人も出てくるだろう。  
どんな人にも、どんな時にも、  
農業が支えてくれる。

### 鐘の音で 一日がはじまる

香川県高松市。JR高松駅から車で三〇分ほど走る。海沿いの市街地から、急な山道を登った先は、「五色台」と呼ばれる、香川を代表する景勝地だ。その山の中に「公益財団法人喝破道場」はある。近くには四国八十八ヶ所霊場八二番札所「根香寺（ねぐろじ）」があり、「お遍路」の通る道ともなっている。

「カランカランカラン」。朝六時になると、喝破道場の境内に、高らかに鐘の音が鳴る。僧服を着た男性が、小走りに鐘を鳴らし、朝を告げる。「喝破道場」の朝は、この「振鈴（しんれい）」からはじまる。鐘の音を合図に起床し、顔を洗うと、坐禅堂へ。静寂の中で、自分と向き合う坐禅の時間が四〇分ほど。さらにその後、本堂で読経。おかげにおかず一品、香の物のシンプルな朝食を食べるのは、午前七時半。そこから作業着に着替え、農作業に入る。昼食を挟んで一七時まで農作業。一七時半からの夕食を済ませると、一九時からは自習の時間。文字を読むことが苦手な人は新聞を

読んだり、箸の使い方などの練習をしたり、自分が苦手と感じている課題に、自分で取り組む時間だ。就寝は二二時。この暮らしが毎日続く。

### 自分を律することが 自分を救う

喝破道場の「自立塾」は、全国から不登校、引きこもりなどの課題を抱えた若者が集まり、集団生活を送りながら自立を目指す施設だ。生活の基本になるのは、禅の修行のスタイル。毎日決まった時間に決まったことをする規則正しくシンプルな生活サイクルの中で自分を律することを体で覚え、生活の自立につながる。それが結局は自分を救うことになる。そのことを肌で実感し、身につけていく。喝破道場には「喝破五訓」という教えがある。仏典の中にある言葉だということだが、その一つに「規律ある幸せ喜ぶ人間となろう」というものがある。まさに自分をコントロールする術を身につけることが、生活の自立につながる。これが、喝破道場の基本的な考え方だ。一九七四年に野田大燈さんが一人で山を切り拓いてつくった喝破道場。

編集部=文  
text by KOTONONE  
岸本 剛=写真  
photograph by Tsuyoshi Kishimoto



喝破道場 理事長 野田大燈さん

